

## 美術の窓(125)

## 興行記録のない役者絵

大和文華館館長 浅野秀剛

二年前の「美術の窓(115) 写楽はいつ、どこで描いたか」で、写楽は「初日の前に、楽屋など特別な場所で、特別に役者にポーズを取ってもらい、下絵を描いた」ということを述べた。写楽の版画のいくつかに、そういうふうを考えないと辻褄が合わない事例があることを根拠に推定したのであるが、興行が始まる前に下絵を描いて版行したとすれば、極端な場合は、「描かれた役者が、病気のために一度も舞台に立つことがなかった」のに版画が制作刊行されている、ということもあり得る。さらに言えば、予定稿で制作され版行されたが、上演されなかった。したがって、興行記録のない作品が制作されていることもあり得ることになる。今回取り上げるのは、そういう事例である。

江戸時代の役者絵の版行は、人気役者の当り役を描いたものや、役者見立絵もあるが、歌舞伎興行に即して制作されたものが圧倒的に多い。明治後期に浮世絵の研究が始まると、役者絵の考証、すなわち、その役者絵が、いつ、どの舞台の、何という役者の何の役を描いたものかが問題となった。それが程度分らないと、研究が始まらないからである。その場合、研究者は、漠然と(と思うが)、浮世絵師は、初日の舞台を見てから急いで下絵を描き版画にした、と考えた。浮世絵専門の研究誌としては最も早い『浮世絵』1号(1915年6月)に、梅堂豊斎(三代歌川国貞)が「役者絵の順序」という談話を発表したことも大きく影響したと考えられる。豊斎は、三代豊国(初代国貞)在世時の幕末の役者似顔絵の注文のしかたに「見立」と「中見」があり、「見立」とは、過去に何度も上演されている演目について、上演前に従来の型な

どを勘案して制作するもの、「中見」とは、初めて上演される演目について、舞台を実見して描くものをいうと述べられた。その結果、初めて上演される演目の多い江戸時代中期の役者絵は、原則として、「中見」、すなわち実際の舞台を見て描いた、となったと推定される。

私が、江戸時代中期以降の役者絵の多くは、初日の前に舞台を見ずに制作されたと考え始めたのは、二十数年前であるが、それが確信になったのは、オクスフォード大学付属アシュモリアン美術館所蔵の文調春章細判役者絵貼込帖の調査した時であった。貼込帖にある二十八図の役者絵には、その全部に、上演年月、座名、役名、役者名などの墨書の書き込みがあり、その記載はほぼ同時代の人の手で成され、原則としてすべて正しいということが判明したのである。二十八図のなかに、明和八年(一七七七)八月一日より江戸中村座で上演された「けいせい名越(なごや)帯」に取材した作品が七図あり、そのうちの四図に二代目瀬川菊之丞のけいせいかつらぎ(傾城葛城)が描かれているが、役者評判記などによると、この時、菊之丞は病気のため一度も舞台に上がらなかったのである。となると、少なくとも菊之丞を描いた四図は、予定稿として想像を交えて制作されたことになる。普通に考えると、七図全部が予定稿(上演前の制作)であり、類推すると、貼込帖にある二十八図の役者絵のほとんどが、同様だったのではないかということになる。

また、歌舞伎の基本書『歌舞伎年表』の、天明元年(一七八一)十一月江戸中村座上演『四天王宿直着綿』の三代目瀬川菊之丞の項に、「菊之丞の暫。

鶴菱の襦(うちかけ)なり。それを素袍であらうと思ひ、錦絵に先走つて出せり。」とあるのも見逃せない。菊之丞が女暫を演じるのに、素襖であろうと推定して錦絵を制作したが、実際は鶴菱紋の打掛であったというもので、現実には、素襖姿の勝川春常画の細判錦絵が遺存している。鶴菱紋の打掛姿の勝川春章画の錦絵も遺存しているので、そちらは、舞台を見てから制作したか、あるいは綿密に打ち合わせをしての制作ということになる。

興行が始まる前に下絵を描いて版行したことを証明できる例として、現在最も早いものは、明和四年(一七六七)の、鳥居清満の細判紅摺絵「九代目市村羽左衛門のおすぎと二代目瀬川菊之丞のむすめかけきよ」(図1)である。清満の様式から明和期(一七六四～七二)頃のもので、お杉は、八百屋お七物において、お七と吉三郎の恋を取り持つ八百屋の下女の名として知られている役名なので、そういったことを手がかりに上演された記録を探すと、明和四年正月市村座「曾我和(やわらぎ)そが」に行き当たる。その時の評判記「役者御身拭」の菊之丞の芸評に、「此度は景清が娘人丸なれど、そがの下女たくのおたへと成、祐成諸共工藤が館へ来り、…次に長刀かい込み行所を祐成にとがめられ、大仏くやう(供養)の見へよし。……女景清の仕内はすごいすごい。」とあるので、菊之丞が景清の娘の役で、景清もどきの太夫供養の場面のような演技をしたことは間違いない。しかし、この時の羽左衛門は、曾我十郎祐成・佐藤忠信・

動の三役は勤めるが、お杉は演じていない。ただ、役割番付の口上を読むと、「和曾我第貳ばんめ八百屋お七の狂言取組申候処、去る御方様方より御望に付(実際には不入りを気にしたか)太平記忠臣講釈」に変えたところ。したがって、二月から二番目として、菊之丞のお七、市川八百蔵の吉三郎、そして羽左衛門のお杉という配役で八百屋お七を上演する予定だったことが推察される。そうすると、この図は、上演前に、関係者に取材して描き版行したが、興行内容の変更により、実際には上演されなかったシーンを描いた作品ということになる。そこで思い起こすのが、鈴木春信画の細判紅摺絵「九代目市村羽左衛門のおすぎ」(播磨屋新七版、図2)で、その図は早くから知られてきたが、上演狂言未詳のまま今に至っているものである。清満の作品の出現とその考証から、春信の作品も、同じ時に予定稿として制作されたものと考えられる。以上のことから、上演狂言未詳の作品の何割かは、興行に先立って制作されたが、実際に上演されなかったもので記録に残らなかったものである可能性がある、と私は考えている。

図1



図2

